

人話と神人話と神話

射日（しゃじつ）神話について

異文化を学ぶ「オロチの射日神話より」

極東ロシアの日本海に面した地方に暮らすオロチという先住民族に次のような神話がある。昔、大地が固まりきっていないころ、太陽が三つあり、できたての大地は熱くて生き物が住めなかった。

その時、ハダウという神が二つの太陽を弓で射落とし、一つだけ残した。

その後、ハダウはワシとカラスを創（つく）り出し、それから人間が生まれた。

あるいは、太陽が三つあったころは大地がとても熱く、人は水中や空中で暮らしていた。

そこで二つの太陽を射落としてようやく涼しくなり、地上で暮らすようになった。

太陽系創成と地球誕生の過程を述べる壮大な話だが、これは「射日（しゃじつ）神話」と呼ばれる創世神話の一種だ。

まさか太陽系の形成過程を人類が記憶していたわけではないが、

類似の神話はウデヘやナーナイなどのオロチに隣接する先住民族のほか、

中国、朝鮮半島、日本、台湾などに見られる。

オロチ、ウデヘ、ナーナイはツングース系の言語と文化をもつ人々。

ツングース系の人々の遠い祖先は、古代中国で「東夷（とうい）」と呼ばれた弓矢のうまさで知られた人々と関係する。

東夷は現在の中国山東省あたりを中心にしたといわれるが、太陽を射するというモチーフはそのあたりにいた遠い祖先からの記憶かもしれない。

国立民族学博物館 佐々木史郎

毎日新聞夕刊（2008年11月5日）に掲載

また中国には英雄が複数の太陽を射落として世界を救ったという射日神話があります。

最も有名なのは漢族の“淮南子（えなんじ）”に書いてある羿（げい）が10個の太陽のうち9個を射落としたというものですが、中国各地の少数民族や漢族の間ですら様々なバリエーションがあり、太陽の数には差があるものの、複数の太陽を射落とすという点では一致しています。この太陽を運ぶ鳥、あるいは太陽の中に住んでいる鳥、または太陽の精そのものが3本足の鳥または鶏です。

解説：淮南子（えなんじ）デジタル大辞泉

中国、前漢時代の哲学書。21編。淮南(わいなん)王劉安(りゅうあん)が編纂(へんさん)させた「鴻烈(こうれつ)」の現存する部分。道家思想を基礎に周末以来の諸家の説を取り入れ、治乱興亡・逸事などを体系的に記述。

百田弥栄子の「中国神話の構造」や「中国の伝承曼荼羅」に詳しく書いてありますが、それを御紹介します。

十日神話(漢族)

湯谷（ようこく）には扶桑の木が伸びていて、十個の太陽が沐浴するところ。そこは黒齒国の北にある。水の中から大木が生えていて、その下の枝には九個の太陽が、上の枝には一個の太陽がいる。“山海経”の“海外東経”より

解説：山海経（せんがいきょう） デジタル大辞泉

中国古代の地理書。18 巻。作者・成立年未詳。戦国時代の資料も含まれるが、前漢以降の成立とされる。洛陽を中心に地理・山脈・河川や物産・風俗のほか神話・伝説などを収録。

堯帝の時代に十個の太陽がいっせいに出来、草木は皆焼け焦げた。堯は羿（弓の名人）に、この十個の太陽を射よと命じた。（羿の射た矢は）そのうちの九個の太陽に命中した。（九個の太陽の）九羽の鳥は皆死んでしまい、羽翼が落ちてきた。“淮南子”より

四川省塩辺県宝公社龍塘生産隊の苗（ミャオ）族の葬送歌

九個の太陽と八個の月がいっせいに出来た。
羿が弓矢で八個の太陽と七個の月を射落とした。
残った一つずつの日月は隠れてしまった。
天地は真っ暗。
オンドリが呼んだ。
オンドリは翼をたたいて三度鳴いた。
すると日月が顔を出した。

広西区南丹県の瑶（ヤオ）族の一支族とされる白褲瑶（ペークーヤオ、苗族に近い）の葬俗歌

昔、太陽が九つあった。
その上九つの月も天にかかっていた。
八日八月を射たのは武吉（ウーチー）。
武吉はみんなに話して聞かせた。

貴州省黔东南州雷山県西山区麻科寨の苗（ミャオ）族の子宝祈願「招礼儀式」

天下に達恰（タチャ）と沙恰（サチャ）兄妹二人のみ。
二人は金を掘って十二日を造り、銀を掘って十二月を造った。
余りに暑いので、兄妹は弓矢を工夫して、十一日十一月を射落とした。

雲南省大理州鶴慶県と劍川県一帯の白（ペー）族の神話「日月甲馬（チャマー）」

天地が離れ始めた頃、天に十個の太陽と一個の月が昇った。
太陽オジたちは大火をめらめら燃え上がらせながら、昼夜を分かつた天を駆け回った。
地上は焼けるような熱さ。
オイの蛙と鶏の兄弟は太陽を追って槍で九個の太陽を刺し殺した。
両親の太陽と月は恐れて天眼洞の奥深くに隠れてしまったから、この世は真っ暗闇。
そこで蛙は天を、鶏は地を探した。
鶏が声を放って呼ぶと、両親は天眼洞から顔を出した。
すかさず天を探していた蛙がさっと降りて来て、左手で父を、右手で母を高くかざした。
こうして大地に日月が戻った。
人々は太陽を呼び出したオンドリに感謝して、赤い帽子を与えた。
だからオンドリには赤い鶏冠がある。
そして祭祀の時には、必ずこの一家を描いた日月甲馬を用いることを忘れないのだった。

伊藤清司が「世界の神話伝説 総解説」の中国の神話伝説で、布朗（プーラン）族の射日神話を解説しています。その要約を御紹介します。

巨大なグメイヤという神が天地を創造した。
しかしグメイヤに敵対する太陽の九姉妹と月の十兄弟は、揃って天地の間にやって来て一斉に照りつけ、地上の全てを全滅させようとした。
グメイヤは八個の太陽と九個の月を射落とした。
さらに残った月も射落とそうとしたが、すでに疲れていたもので矢は月に当たらずかすめただけ。
月は思わず冷や汗をかき、それ以来冷たくなって熱を出せないようになってしまった。
逃げ出した太陽と月は洞窟に隠れ、夫婦になった。
世界が真っ暗になったので、グメイヤはオンドリを遣わし、太陽と月に洞窟から出て来るよう説得させた。
そして一人は昼、もう一人は夜に別々に出てくること、ただし月の初めと終わりには二人一緒に洞窟の中で会っていいと命じた。
若い女性である太陽は夜が怖いので昼に出てくることにしたが、人に見られるのが恥ずかしい。夫である月は妻である太陽に針を渡し、顔を見ようとする者の目をこれで刺すように言った。
月と太陽がいよいよ洞窟から出ようとした時、大きな岩が邪魔をして出られない。
そこで力自慢のイノシシが岩を動かして入口を開け、月と太陽を外に出してやった。



日本神話にも三本足の鳥が出てきます。神武天皇の東征を助けた八咫鳥（やたがらす）です。日本サッカー協会の標章になっていますので、御存知の方も多いのではないのでしょうか？

よくよく考えてみると「これは大変な事だ」と思います。

なぜかと言うと、「農耕社会」以前の「狩猟社会」に誕生した説話が二十世紀の極東ロシアの日本海に面した地方や中国各地の少数民族や漢族の間に伝わっていて、それを学者が採集したという事になります。

現代の常識では、現在に伝わっている神話や説話は、だいたい江戸時代中期、古くても室町ぐらいで、それ以前はとても無理ですというのが、だいたい民俗学の常識だそうです。

ところが、今のが正しければ室町どころではない。

「農耕社会」どころではなく「狩猟社会」に誕生した説話が二十世紀に伝わっているという事になってくる。非常に、怖いテーマです。ところが荻原真子さんという学者の方が「沿海州には石を投げて太陽を落す話があるんです。」と言っている。

解説：荻原真子（おぎはら しんこ）文化人類学・民俗学の研究者：アムールランド文化とアイヌ物質文化形成に関する言語・生態人類学的研究

：2013 年度: 千葉大学, 名誉教授 「アイヌ口承文芸」等がある。

大阪の民族学博物館で民俗学シンポジウム（1985年頃）東京国際大学の助教授、ロシア語が堪能で、ソ連の沿海州、そのオロチ族、オロチョン族、など原住民に伝わっている説話を、ソ連の学者がロシア語で採集したのを訳して報告。いわゆる沿海州における射日神話の問題の報告。

狩猟（しゅりょう）といえば、「昔から狩猟はあった」という頭で考えてきましたが、ところがじつは、その「狩猟時代」というのも上限があるのではないか。

つまりそれ以前には、「狩猟なき何十万年」が、「弓矢なき何十万年」が流れていたのではないか。言葉にすると、いわゆる「投石社会」です。

人間は、そして弓矢を発明して、「或る日」というのは短絡的ですが、弓矢を発明してにわかに威張りはじめた。

それまでは動物の中で人間という動物は、たいした動物ではなかったと思うんです。

走る力だって跳ぶ力だって叫ぶ力だって遠くを見る力だって、人間よりずっとすぐれた動物がたくさんいます。「一番」というのは大袈裟かも知れませんが、たいへんみすぼらしい存在が人間ではなかったのか。

NHK の番組などを見ると、身を細くして地球をとぼとぼ歩いていたのではないかと思うのですが、ところが、発明（知恵）・道具を作る力で、弓矢を発明してにわかに他の動物に対して強さを発揮しはじめた。と考えてあまり誤りではないのではないのでしょうか。

その証拠に簡単な証明があります。今の動物園へ行ってお猿さんを見ますと、お猿さんは石を投げているけれど、弓矢を使っているお猿さんというのを見たことはありません。動物園だけではない、大自然の中でもないと思われます。

あったらたいへんな発見です。だからお猿さんというのは、まだ弓矢発明以前の時間帯に存在しているのではないか、広い意味で、お猿さんの一員であるわれわれは、すでに弓矢発明以後の時間帯に入っている。そう言えるのではないのでしょうか。

射日（しゃじつ）神話の淵源

というふうに考えてみますと、先程の石を投げて太陽を落すという話は、弓矢発明以前の時間帯、いわば「投石社会」に生み出された説話ではないでしょうか。次をご覧ください。

ウリチ族（ロシア連邦の極東地域、ハバロフスク地方に住む先住民：世界大百科事典）

一人の男と一人の女がいた。三つの太陽があり、大地はなかった。

その当時は、草で小舎を立てた。魚が（水から）跳ね出ると焼け焦げて死んだものだ。草は燃え、そして、小舎も燃えてしまった。男は戻って来て、新しい小舎をつくって待った。太陽が現われたので、彼はそれを殺した。残ったのは二つの太陽だった。彼は小舎から石を投げつけて、もう一つの太陽を殺した。それで残ったのは一つの太陽となった。

もう簡潔で、これ以上も以下もいらないというような、説話の中の説話という感じがします。ここでは弓矢を使っていない。石を投げて太陽を落すという説話になっていいです。こんな説話を、もうすでに弓矢が出来て後の時間帯に作ったら本当に笑いものになってしまいます。“石を投げて太陽を落すより、弓矢で落したらどう？”と言われるに決ってます。

ところがまだ弓矢発明以前の時間帯の社会なら、こういう形になるよりしょうがないです。ということで、これは「狩猟社会」という上限を突破してそれ以前の時間帯に誕生した説話が二十世紀に伝わっているのではないかという、今までの民俗学、神話学などの概念をこわすようなところへ、論理的に導かれた。と言えるのではないのでしょうか。

というのは、これを考えついた教授（古田 武彦氏）が、授業後学生から「先生、今の、石を投げてという時には、神様はいなかったんですか」こう聞かれたそうです。「要するにその学生が疑問にしたのは、今の話には神様が登場しない。一人の男と一人の女しか登場しない。神様はどうなったんでしょうという質問だったんです。それで教授は、「恐らく、神様はまだ生れていなかったのだであろうと思います」と。答えたそうです。

解説：古田 武彦（ふるた たけひこ、1926 年（大正 15 年）8 月 8 日 - 2015 年（平成 27 年）10 月 14 日）は、日本の思想史学者・古代史研究家。元昭和薬科大学教授。専門は親鸞等の中世思想史だが、むしろ古代史研究において著名である。

つまり、「男と女」というのは人類始まったと同時にわかっていたと思うんです。男と女は、見ればわかります。しかし「神様」というのは、見えないけれど、いるんだというんでしょう、もうこんな高尚な話ってないわけです。誰も見えないけれど神様というのはいらんだぞ、というんですから、こんな考え方が人類発生と同時に始まったはずはないと考えます。もう、人間の能力が、たいへん抽象化が進んでいってそのあげくの果てに到達した、すごい概念。概念の発見というか、発明というか、概念とすれば発明、一つの事物と考えれば発見である。と教授は考えた。

これも簡単に証明出来るんです。なぜかという、さっきのように、もう一回動物園へ行けばいいんです。祭壇を築いて拝んでいるお猿さんを見たことはありますか。あったらトップニュースです。

しかし、恐らく動物園のみならず、自然の山野でも、お猿さんが祭壇を築いているという話は聞いたことがありません。そのことは、やはりお猿さんはまだ神を発見以前の時間帯にいたのではないのでしょうか。とすれば、人間というお猿さんは、広い意味で、人間というお猿さんは、ある日、これも短絡的に言いますと、ある日神を発見したことによって、あるいは、神という概念を発見したことによって、人間の精神的な能力は一新し、深さと広さを急速に拡大するに到ったのではないのでしょうか。こう考えて私は大きく誤ってはいないと思います。

念のために書きますが、いろんな皆さんが、それぞれの信仰をもっておられます。クリスチャンであるとか、いろいろその他ご信仰をもっている方がおられると思うんですが、そういう信仰の立場から見ると、けしからんと言われるかも知れませんが、今言っているのは、信仰の問題ではなくて歴史の問題です。人間の歴史の問題ですので、そのつもりで勘弁していただき、信仰とは別個にお聞きいただければ幸いです。

さて、こういう立場から今のように、ある段階で神様を発見した。それ以後作られたのが神話です。つまり神様がさっきのように登場して来て弓矢で太陽を落すという活躍を演じられるのは、その社会、お話を聞く「社会」がなければお話が出来ないわけです。その社会の人々が、「神様」という概念を共通して共有しているから、そういう話が成り立つ訳です。

「神様」、「え？何？」「そんなの、知らないよ」。というのではお話にならない。だから神という発見があって、以後はじめて神様は説話の中で活躍を演じられるのであって、その「発見以前」には神様の活躍の場はない。当り前のことです。と考えます

そうしますと、先の雲南省の神様が弓矢で太陽を射たという話は、当然神が発見されて以後、の話である。ところが沿海州の太陽を殺す話は、神様が全然出て来ない。確かにこんな地球の始まりの第一番目みたいな話だから、神様は出て来ていいはずだと思って、先程の学生は、質問したと思います。ところが出て来ないということは、まだ神様は地球上に「誕生」していなかった。だからこの説話には神様は登場の場はなかった。と教授は、答えたと考えられます。

そして、この考え方が認められますと、これからは地球上の神々の話、神話とかそういうものを全部集めて、データベース化して、そして前後（時代順に）関係をつける。たとえば、アイヌの神話にあります、小人の神様がいます。いない、いないとさがし回ったら、葉っぱの陰にかくれて見つからないのを楽しんでいた、などという、本当にいたずら少年のような神様がいます。あのような神様は、たいへん由緒古い、まだ人類の中で最初に生れたような時期の神様ではないのでしょうか。

それに対して天照大神。

『古事記』『日本書紀』に出て来ますのは天岩戸、あそこでせっかく須佐之男命の乱暴を避けて天岩戸に閉じ籠ったのに、外でどんちゃん騒ぎをやっている。

「どうしたの」と聞くと「いや、あなたよりもっとすばらしい神様が出て来たのでみんな大喜びをしているところです。」嫉妬心にかられてそっと開けて見たら、手力男の神がぱっと引き開けたという。

だから嫉妬心に満ちた女性という点では、現代の女性と似たか寄ったかの性格をもった神様である。その上、岩の向うも見通せぬ。つまり「超能力」をもたないのです。

人間と非常によく似た神様です。こういう神様もある。

さらに今度は、バイブル（聖書）の神様というのは万能の神様です。宇宙を造ったと称する万能の神様とされています。あれは、一番“新参の”神様と考えられます。

このようなことを言って、クリスチャンの方、怒らないで下さい。つまり人類の歴史の中で、必ずしも嘘ではないと思われます。恐らく、もっと新しいのが回教の神様です。

バイブルを“参考”にしながら、もっと「抽象化」した万能の神を造りあげたわけです。

こういう万能の神というのは、人類史の中で一番“最近”に造られた概念である。とこう考えざるをえないわけです。

そうしますとさっき言いましたように、こういう神々を考古学の土器の編年のように、ずーとその前後関係をつけていくわけです。そうするとその前後関係の編年体系は、すなわち「人類の精神の発達史」の映し絵である。と言えるかもしれません。

こういう学問というのはまだありません。

なぜないかと言うと、結局ヨーロッパ、アメリカというのはキリスト教社会、だから、もしこれがニューヨークかなんかであれば、もう帰りが危ない。いつ、狂信的な人たちに、“ガン”とやられるかも知れない。と思われます。

だから、ヨーロッパ、アメリカでは、そういうことを「思った」にしても、公然と言うわけにはいかない、書くわけにはいかない。

ちょうど戦前の時に、天皇制批判を公然と書けなかったのと同じ事です。

一方、ソ連や中国というのは、今度はマルクスに従って、「宗教は阿片である」と頭から軽蔑していますから、今のようない研究はしない。と言われていました。

再度、申し上げますが、バイブルや各宗教の神を軽視しているのではありません。

むしろ人類が各段階で生み出した貴重な遺産というか文化遺産、精神の遺産であると思います。また尊敬しています。ですから「今のようない宗教は阿片だ。神様はいんちきだところ決めてかかる、その思想が絶対的に支配する世界では、やはりこういう研究は育たない。」と言いたい訳です。

神生み神話

ところが、意外な問題にぶつかりました。じつは『日本書紀』の中に、これと同じテーマが存在します。それは「神生み神話」という言いますか。「国生み神話」ということは皆さんよくご存知ですが。ところが『古事記』『日本書紀』の「国生み神話」の前に、神様が次々生まれるという神話があります。

これは名前がないから、仮に「神生み神話」とさせていただきます。この神の生れるタイプは三つのタイプにわかれている。三つしかタイプはないんです。

一つは神様が一柱生れたというタイプ。

これは（第五）一書で、終りから二つ目のところにあります。

一書に曰はく、天地未（いま）だ生らざる時に、譬（たと）へば海上に浮べる雲の根係（かか）る所無きが猶（ごと）し。其の中に一物（ひとつのもの）生（な）れり。葦牙（あしかび）の初めて[泥/土]（ひぢ）の中に生（おひい）でたるが如し。便（すなは）ち人と化為（な）る。國常立尊と號（まう）す。

[泥/土]（ひぢ）は、泥の下に土、JIS 第3水準、ユニコード番号 57FF

これは国常立が一神現われたという、このスタイル一つだけ。

次は二神が現われたというタイプが二つございます。

一つは（第三）一書、これも読んでみます。

一書に曰はく、天地（あめつち）混（まうか）れ成る時に、始めて神人有す。可美葦牙彦舅尊（うましあしかびひこちのみこと）と號す。次に國底立尊（くにのそこたちのみこと）。彦舅、此をば比古尼（ひこち）と云ふ。

これは二神が現われたというタイプ。

もう一つ（第四）一書も二神が現われたというタイプ。

あとは三神タイプが全部。本文がそうです。

それから（第一）一書、（第二）一書、（第四）一書の方は二つに分かれてその後半、

『古事記』もこれと同型です。それで（第六）一書、みんな三神が現われている。神様の名前は違うが三神が現われたというタイプ。

この三種類しかない。四神・五神が現われたというタイプはないんです、「最初に現われた」という形ではありません。

この三つのタイプの中で、どれが古くてどれが新しいかと考えてみると、やはり、一神タイプが最初で、次に二神タイプ、次に三神タイプという発展をとげて来たのではないかと考えました。

これは本居宣長とは逆です。本居宣長は『古事記』を非常に尊重しました。

『古事記』は三神タイプですから、だからその中で少し「伝」が欠け落ちたのが二つ。また欠け落ちたのが一つ、という感じ方が、どうも宣長にはあったようですが、そうではなくて、「一から二、二から三へ」という展開であろうと考えました。

なぜかと言いますと、もう一回一神タイプの（第五）一書を見ていただきます。

一書に曰はく、天地（あめつち）未だ生らざる時に、譬へば海上に浮べる雲の根係る所無きが猶し。其の中に一物生れり。葦牙の初めて[泥/土]の中に生でたるが如し。

便ち人と化為る。國常立尊と號す。

とこうありますね。ところが今の二神タイプの最初、（第三）一書をもう一回読んでみますと、

一書曰はく、天地混れ成る時に、始めて神人有す。可美葦牙彦舅尊と號す。次に國底立尊。・・・とこうなっていく。だから、一神タイプの時には“葦牙の初めて泥土の中に生でたるが如し”と言って、生れた一神の形容のことばだったのが、こちらの方では独立した神格になっているわけです。

これは、もし二神タイプが先で一神が後と考えた場合は、独立した神格を解体して片方の神さんの形容詞に使ったということになるわけです。こんなのは現代人ならともかく、古代の人のメンタリティでは、そういうことはありえないのではないかと。

逆に最初は形容のことばだったのが、独立して一つの神格に、また成長するという、この方が考えやすいと思うのです。

そういう点でやはり一神タイプが最初、二神タイプが後と。三神タイプでも可美葦牙彦舅尊は結構出てきます。という「系列」をもっていると判断しました。

この判断が基本的に正しければ、詳しく言えはいろいろまた問題はあるてしょうが、基本的にはそういう理解が可能だと思うんです。そうするとえらいことになりました。

なぜかと言うと、さっきの『播磨風土記』で見たのと同じ事なんです、よく読んでいるうちに、一神タイプの（第五）一書、もう一回見て下さい。（第五）一書のまん中の行の最後、“すなわちかみとなる”と読みましたが、漢字は「人」と書いてあります。つまり『日本書紀』の古写本では「人」という字しか書いてありません。

それを宣長が“カミ”と読んだんです。カナを振って。それで『日本書紀』の注釈をつけた学者が、宣長の弟子になるような人達が“カミ”と皆読んでいくわけです。それで明治以後、岩波の『日本古典文学大系』などは皆、「かみ」と仮名をふっているわけです。だから皆、「かみ」と読んで今までできていた。だから「神生み神話」と言っても、皆さんがけしからんと思われなかったのは、皆さんもだいたいそういうくせできておられたから。実際は「神様」ではない、生れたのは「人」が生れた、と書いてありました。

さて次の今の（第三）一書、これをもう一回見て下さい。

（第三）一書の一行目、「初めて神人有す」、つまりこれも神のごとき人。これも並の人ではないが結論は人です。“不思議な能力を持った人”とこう言う。これも「神人」と言う。やはり結論は人です。

ところがそれ以外、つまり二神タイプのもう一つ（第四）一書全半と、三神タイプは全部「神」と書いてある。「人」ではない。「神人」でもない。全部「神」という字が書いてある。これは「かみ」と読んでべつに問題はありません。

そうすると、今の前後関係の判断が間違いなければ、『日本書紀』の示す「神生み神話」も、じつは最初は「人生み神話」であった。第二段階が「神人生み神話」であった。第三段階で「神生み神話」になっていった、その経過がみごとに示されていたわけです。

するとさきほどの射日神話で、考えましたことと同じ傾向です。
それよりも少し詳しいかも知れません。というのは、「神人」という中間段階が入っているだけに、沿海州のより詳しい。
それはそうでしょう。沿海州のは、ソ連の学者が二十世紀に採録しているのですから。ところが『日本書紀』は、少なくとも八世紀にはもう記録されているのですから。
実際はもっと早い六、七世紀頃に、九州王朝側で記録されたと思うのですが、その再録だともいえますけれど、少くとも八世紀には最終的に記録されているのですから、二十世紀の記録より、詳しくて当たり前だと思います。

ということで、“人類は永い無神時代を経ていた。
だからその時代には「神話」はなかった。
あえて言えば人話 「人の話」「人話の数十万年」が過ぎた。
恐らく人間が生れて口があるんだからおしゃべりはかなり早くからやっていたと思うんですが、そうすれば説話はあるわけです。

それは「神無き説話」で、つまり「人話」であった。
それからやがて「神人話」の時間帯がやってきた。
それで最後に「神話」の段階がきた。
この点は、ヨーロッパ、アメリカ、ソ連を含めて、神話学では「人類は神話から始まった。」と皆そういう処理をしています。それは違う、という話になってきます。
この論理がもし間違っていなければ、今までの神話学はあやまりであって、「神話は新しい。人話が古い」ということになってくる訳です。（了）

参考資料

- ・日本書紀上 全現代語訳 宇治谷孟（うじたにつとむ）、株式会社講談社、鈴木哲
- ・その他は、本文中に「解説」として記載